東方蛙鳴遊

アストレアセカンド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方蛙鳴遊

【Nコード】

N0820T

【作者名】

アストレアセカンド

【あらすじ】

早苗の一言が原因で諏訪子が出した。行き場に困った諏訪子は霊夢の神社へと足を向け、数日間だけお世話になる。しかし、霊夢も霊夢で白玉楼で行われる花見の準備で忙しかった。諏訪子は霊夢と一緒に花見の準備をすることに。

(前書き)

東方で諏訪子と霊夢主体の家出話。戦闘とかはないので悪しからず。また独自設定嫌だとかこんなのは東方じゃないと言われる方は遠慮なくブラウザを閉じていただきたく。

ある日の幻想郷。妖怪の山に住みついた一軒の神社。

守矢神社と呼ばれる二つの神を祭った神社がそこにはあった。

妖怪や人々の知る博麗神社より幾分か大きいその神社では蛇と蛙が祭られている。

そして人とともに住み、山の妖怪たちの信仰を集めていた。

それはさておきこっちは寂れ……昔ながらの趣が残る博霊神社。

今日は朝から妙な珍客が現れた。

幻想郷は怠惰にも平和で幸せな時間が流れていたのだった。

「家出した。今日から世話になるよ」

博麗神社で、洩矢諏訪子がこんなことを言い出さなければ。

現れたのは守矢神社で奉られる二柱の一角、洩矢諏訪子その人だった。

～少女困惑中～

「ついにボケたか、土着の神。見た目幼子のごとくとも中身は長寿生きてきた両性の類。やはり爬虫の類とは相容れなんだか」

寂れた神社に現れたのは奇妙な帽子をかぶった小さな神様。肩口にそろえられた髪に紫と白のコントラストの利いた服を着る。どう見ても神様などに見えないが、それでも人や妖怪より何百年と生きてきたのは確かはず。

しかし、博麗神社の巫女、博麗霊夢はあくまでも冷静だ。それに屈せず私も声を張る。

「いやボケてないし、別に追い出されたわけでもない。大体何よ、

そのけつたいな話し方は」

私の目の前には赤と白のおめでたい巫女服を着た巫女が、溜息をつきながらめんどくさいのが来た的な表情をする。黙っていけば綺麗な部類に入る顔立ちだが、何しろ性格も言うこともきつい。早苗とは正反対の巫女だというのは認識している。でも、それ以外は知らない。

「一応神様だから敬語使ったほうがいいかなあ、なんて」

「一応とか疑問系で聞いたりしないですよ！ ていうか、さっきの敬語なんて含まれてないでしょ！ 全部悪口だったし！」

「ああ、気にしなくてもいいわよ」

「私が気にするんだよ！」

まあまあと、興奮した私を霊夢がなだめる。

「立ったままじゃ落ち着かないわ。隣に座りなさいよ」

霊夢がそのように勧めたため、言われるままに縁側に一緒に腰掛ける。

だんだん落ち着いてきたので一番気がかりなことから聞いてみようとしたのか、霊夢は私に会話を振った。

「んで？ 早苗には私が連絡すればいいの？ もしくは迷子？ おうちまで送ってあげましょうか？」

「……どこまで博麗の巫女は神を侮辱すれば気が済むのかなあ……」
ピクピクと眉間を引く付かせながら呆れる。

「あ、そうか、神様だから信仰心を使って簡単に道ぐらい分かるのか」

「……まあ道くらい簡単にわかるけど、そんなところで力を使うようじゃ神様失格だよ。神様は人に助けを与える位じゃないとさすがに」

「『神社どつちか分かる？』って聞いたら、人里なら簡単に教えてもらえるしね！」

「私の信仰心はどこまでも見下されてるの！？」

「私だったら飴くれる怪しい小太りの男と幼いあーうー言ってる神

様なら、収益をくれる前者を選ぶわね」

「霊夢の基準がおかしいよ！ 明らかに前者は人として選んじやまずい人でしょ！」

「それで飽くれたら財布盗んで無縁塚に捨ててくる」

「あなた人としてねじれまくってるよ！ 巫女云々（うんぬん）よりも前に人ができていない！」

「お……ここで一句出来ました」

「作らなくていいって！」

「ぜえぜえと肩で息をする。これ以上霊夢のペースに巻き込まれるのはごめんだ。無理やりにでも話のインシアチブを獲得しなくちゃ。」

「あなたと話していると、ほんとに疲れるわね」

「そう？ 私は楽しいわよ。神様との対話なんて、あまり出来る機会なんてないし」

ケラケラと心のそこから楽しそうな声を上げる霊夢に辟易し、肩をがっくりと落とす。

「そりゃね、一方的にからかうほうは面白いだろうけど……」

それでもからかわれるほうは面白くない。反撃ののろしを上げるために横に振り返る。

「でも」

振り向いたときには霊夢は居なかった。

ぶつぶつ言っている私のことなど歯牙にもかけないように霊夢はどこかに行ってしまったようだ。やっぱり神様の威厳や自覚が足りないのか。ミシャグジ様もしょぼんとしている。

守矢の社から出てきたのも、話の根幹としては『私の存在意義』のあり方が深いところでリンクしている。やはり守矢以外の社では私を迎え入れることなどできないのだろうか。

一人取り残されて寂寥感せきりょうかんが沸いてくる。いまの霊夢のように神奈子も早苗も、私のことを思っているのだろうか。

地面に触れる。

神様など、無限に増えることが出来る。人を救えない神様は自分だ

って救えない。

神様は要らなければ信仰されることはない。

八百万の神々の中、自分ひとりが消えたとしても何も変わらないのが恐ろしい。

「おーい、聞いてるの?」

とたん、深い思考から目覚めさせられる。

「……え? どこ行つてたの?」

「……いや、さっきはからかいすぎたかなあつて思つて。ま、居る分には問題ないからゆっくりしていきなさい。一応お客様だから茶菓子でも取つてきたのよ。好きでしょ? お供え」

「……ごめん、聞いてなかった……つて、泊まつてもいいの?」

思わぬ申し出に息が詰まった。二つ返事で決められてもいいことじゃないのは分かっている。

「いまさらだけど、迷惑、じゃない?」

「神社の存在意義を根本から神様が否定しないでよ。神社つて神様の社なのよ? 他の神様だろうが受け入れてやるぐらいの容量の深さが無くてどうするのよ」

台所から緑茶とお茶菓子を出してきた霊夢が隣に座る。霊夢が持つてきて来てくれたお菓子とお茶を飲みながら、とりあえず一息つく。はあ、落ち着く。

「それで? 家出の原因とあんたが妙に意気消沈してる理由から教えてくれる?」

「そんなに落ち込んでるように見える?」

「そうね……いつもあーうー言ってるあんたが今に限って一度もその発言をしていないところから考えて、相当落ち込んでるのが見て取れるわ」

「……霊夢の神社、潰れてしまえばいいのに……」

「ちよ……神様でしょ!?! 言葉は選びなさいよ!」

私はあーうーと言わなければ感情さえ読み取れてしまうほど単純なのだろうか。

「ま、元気が無いのは認めるけど……」

神奈子と早苗の会話を思い出すと、やりきれない。それに切なくて泣けてくる。

霊夢も対応に困っているようだった。

「やれやれ、困ったものね。とりあえず話しなさいな。少しはすつきりするわよ?」

「霊夢、ありがとう……早苗には悪いけど、霊夢の好感度が上がった気がする。……でも、ごめん……。まだ話せない」

「別に無理に聞きだすつもりもないわよ。でも、いつかは話しなさいね。今はまだ無理でも」

「うん……ごめん……」

なんだか空気が重くなってしまった。その空気を払拭はらいつくするかのよう
に霊夢は大きく背伸びする。そしてわざとらしく大きな声を出した。

「さてと！ そろそろ日も暮れるわね。諏訪子、あんた料理はできる?」

「いや、早苗が用意してくれるからやったことは……」

「じゃあ手伝いなさい。『働かざる者食うべからず』よ。いくら神様とは言っても、日常のことぐらい自分でできなきゃ笑われるわよ」

「むう……わ、わかったよ。でも、あんまり難しいものはちょっと無理だよ?」

「大丈夫よ。私が見てるから大きな失敗はしないでしょ」

「……霊夢」

「……何よ、何か言いたいことでもあるの?」

「いや、これはちょっと」

「うん、まああんたが言いたいことは分かるわ」

本当なら、このテーブルには拙いなりに頑張った、見栄えの良い
とは言えなくてもおいしい料理が並ぶはずだった。

ちなみに作るうとしたのはご飯と焼き魚と大根おろし、味噌汁に

漬物、そしてデザートに砂糖を焦がした黒蜜をかけた近所からもらった寒天と、結構おいしそうな献立だった。

しかし、これは……。

「まあもの見事に失敗ね。焼き魚やご飯はほとんど炭。味噌汁にはみそがなくて困ったし、漬物はいつたい何年放置してたのよ」

まったく呆れたものだった。あれだけ私に言っておきながら霊夢も得意な方ではなかったらしい。作れるけど上手な方ではない、といった感じが。

「う、うるさいわね。でもほら、寒天と漬物は上手く……いや、食べれるかな？」

「砂糖は黒蜜というよりカラメルソースが炭素化したような……」

「食べれば一緒よ!」

怒涛の勢いで（まだかろうじて食べれそうな）料理を頼張る霊夢。

「霊夢、大丈夫?」

「……まだ、吐き気が……」

無理するから……と心中で思う。布団に寝かせて様子を見ているとずいぶん落ち着いたようだ。ちなみに霊夢が何とか処理を試みた料理は私の口に入ることなく、残飯としてその命をちらした。

不意に、ぐうぐうと可愛らしい音が鳴った。 恥ずかしなが

ら、私のおなかの虫だ。

「あ………う………」

「うう、動けない身体が恨めしいわ。ごめんね諏訪子……明日食材探しに行きましょうか……」

「そこまで責任を感じなくてもいいけど」

病床についたせいかもしれないもより弱気だな。

「まあ、覚えておきなさい。明日は朝から食材集めよ! 春の白玉楼での宴会用も兼ねて」

「白玉楼で……宴会するの?」

それは初耳だ。

「じゃあ神奈子と早苗に　　って、私、家出したんだ……」
「はいはい、セルフで落ち込まない落ち込まない。後でブン屋がピラをばら撒くでしょう」

また少し陰鬱になりかけた私を霊夢が軌道修正する。でも、あれ？

「でも、そういうのは幽々子がやるんじゃないの？　白玉楼の主は幽々子でしょう？」

「ああ、白玉楼ではなかなか宴会は開くことがないから、今回だけ私と紫が手伝うことになってるのよ。勝手がわからないって理由でめんどくさがって、中止になるよりマシでしょ？」

ああ、なるほど。そういうことか。幹事に慣れている人でなければ宴会は難しい。だからといって全て丸投げするのは褒められたものじゃないけど。

「今の季節で考えると……花見？」

「そうよ。白玉楼の桜は壮観でね、前から一度は宴会を試してみようって話が出てたから」

それに……と霊夢は続きを語った。

「去年は白玉楼のやつらのおかげで花見が遅れたしね。そのことも関連あつて、伊吹山の鬼……萃香が「責任取れ」って企画させたのよ。ま、去年はその埋め合わせの花見を何回もしたんだけどね」

「ふ〜ん。鬼もたまにはいいこと言うね。それになかなか粹じゃない」

「抜け目ないだけよ。常に酔ってる萃香だけど、ことお酒に関係する事柄は絶対に忘れないわ。……そんなことしなくても白玉楼にはしっかりした従者がいるから、本番前に準備が怠ることもなさそうだし」

花見……花見かあ。しばらく神社や信仰心集めでちゃんとした宴会にはあまり行ってなかったからなあ。

「ね、ねえ、霊夢、それって私も参加してもいいものかな？」

「何言ってるのよ。私と一緒に食材集めを行うからには、絶対に参

加してもらわないとこつちが困るわよ。あんた達ただでさえ顔出さないから、こつちとしてもこつちで参加してもらわないとね」

「それじゃあ、私参加する！」

「あつたりまえよ。さ、早く寝なさい。明日は朝から食材集めに行くんだから」

「そういえば、どこに行くの？」

「そうねえ……季節じゃないけど」

「うんとしばらく考え込んだ霊夢はやがて何かを思いついたのか、キノコ狩りに行きましようか」
「といった。」

～少女就寝中～

「はあ？ 食べられるキノコを教えろなあ？」

魔法使いを忠実に顕現した少女が、目の前にいた。白と黒の服にウェーブがかかった金紗羅の髪。これで黒ネコでもいれば完全に魔法使いなのだが、残念ながら彼女はツチノコしか飼っていない。

眠そうに眼をこすりながら、日の昇る数時間前に魔法の森の霧雨魔理沙の家を襲撃した私たちは、不機嫌な家主に協力を求めていた。「宴会用に食べ物をとつときたいのよ。でも、このキノコ特殊でしょ？ あんたならわかるんじゃないの？」

「そりゃ、一応研究してるから、どんなキノコが食べられるか見分けるなんざ簡単だぜ」

大きなあくびを隠しもせず、魔理沙はねぼけまなこで私を睨んだ。「特殊な組み合わせだな。確か……諏訪子か？ お前も手伝わされてるのか？」

「寝起きは不機嫌なのか、昨日が遅かったからなのかなかなか目の焦点が合わない。」

「いや、私は」

「ま、有体に言えば違つわね。手伝ってるのは諏訪子の意思だけど」

「ふん。ま、いいぜ。目が冴えてきたし、お前らだけでキノコ狩りなんか行かせたら、宴会の席が大変そうだしな」

不承不承といった感じで魔理沙も頷いた。そしていつもの服装にチャームポイントと思わしき黒い帽子をかぶるうか、といったときに魔理沙はこつちを見た。

そして何か考えたと思つたら、その手の動きを止めて私に近付いてきた。

お前も大変だな、と魔理沙が私の頭に自分の帽子をかぶせた。

「???」

「その変な帽子は置いときな。そのまま森に入ればキノコの胞子がつきそうだからな。あとからキノコの胞子が成長して、大変なことになる前にな。代わりに私のを貸してやるよ」

「……ありがとう」

「いや、どういたしまして」

にこやかに魔理沙は私の頭を押さえて、私は初めてのキノコ狩りをした。

「魔理沙、これは？」

霊夢が魔理沙の家の近くで見つけたキノコを差し出す。

「あゝ、ダメだ。それは毒がある」

私も周囲からかき集めたキノコを魔理沙に鑑定してもらう。

「ん？ お、これは食えるぜ。副作用もないしな、それに美味だ」

「そうなの？ えへへ……」

「ま、それ以外は……毒だな」

「あゝう」

ちよつとだけ落ち込む。やはり安全なキノコを見分けるのは難しいなあ。

「いいか？ ここら辺はいいキノコはない。食えたり魔法に使えるものは私取り尽くしたからな。もっと奥の方はまだ探してないし、そろそろ新芽が成長したところだろう。そっちに行こうぜ。魔法の森

のキノコに季節は関係ないからな」

ま、そうだろうな。近くにあったら魔理沙が取るだろうし。

「そうね。それで、どう行くの？」

霊夢が周りの景色を見ながら、方法を尋ねた。

辺りはまだ暗く、自分の足を照らすランタンがあるぐらいだ。

こんな暗い森を飛ぶなんて危険すぎるし、日が昇るのにもまだ時間があるだろう。

「ああ、簡単だぜ。

キノコは湿気の強いところが一番好きなんだ。

だから湿気の多い魔法の森には人を惑わす魔法のキノコがそこらへんに生えているわけだが……湿気が一番強いところといったら湖の近くだろう」

「それもそうね。ここに一番近い湖っていったら……」

「霧の湖？」

「そういうことだな。その下流域には食えるキノコが多く生えるぞ。妖精の住処だけあって魔法の森の水をはじくらしくてな。私は魔法専門にキノコを採っているわけだから、そこは手つかずというわけだ。食用キノコはついでに採るようなもんだしな」

なるほどね。

「だけど、魔理沙が行ってない場所にどうやって行くの？」

「……」

「……」

「……」

「ま、キノコを探しながら探そうぜ」

アクロバティックなパドックスを唱えた魔理沙についていったけど、結局霧の湖の下流域にたどり着くことはなかった。

「ふう、結構疲れるね」

「初めての奴は辛いだろうな。しんどかったら休んでもいいんだぜ？」

「いや、ちゃんと探さないと。霊夢に悪いし」

「神様なんだからもつと偉そうなやつかと思っていたが、変な奴だったぜ」

「う……」

「ま、いい意味で、だけどな」

「……あ〜う〜」

なんか、照れるな。魔理沙の帽子を深くかぶる。

「ん……空がやっと白んできたな……」

ん〜と言いながら魔理沙は私たちの集めたキノコを再確認して「よし」と頷いた。

「もうだいたい集まったか。私も今度の宴会には追加のキノコやイノシシを取って行くから楽しみにしてるよ」

「情報伝わるの早いね〜。白玉楼の花見でしょ？」

「そろそろ花見の時期だしな。萃香あたりがつまみを持って来いと忠告するんだよ。あいつこの前試しに食べたキノコの味を占めやがってな」

そんなにおいしいのかな？

そんなことを考えていると、『きゅう〜』とお腹がなった。

「なんだ、腹減ったのか。よければキノコ鍋でも食べてくか？ 私も腹減ったぜ」

「あ、あはは、よければお願いします……」

顔を真っ赤にしながら私はつつむくしかなかった。魔理沙はそんな私を豪快に笑い飛ばす。

「はっはっは。よし、腕によりをかけて作るぜ」

さて、霊夢はどこに行ったんだろうと見渡しの良くなった森を眺める。何せあの服だ。目立つはずだろう。

「霊夢、どこだろう？」

「ちよいと高いところから探せば見つかるぜ」

そういつと魔理沙は箒にまたがると私を手招きした。

「？」

ちよいちよいと魔理沙に近付くと、グイツと私の手を取って、

「私の帽子、落とさないでくれよ」

私を箒の後ろに乗せてくれた。

「安全運転だが、大丈夫か？」

「うん、だいじょうぶ」

ギョツと落ちないように魔理沙にしがみつく。私も霊夢を探すためにキョロキョロと下を見下ろす。

霊夢は案外早くに見つかった。それほど離れていなかったのか、5分もすれば見つかった。

「どこ行つてたのよ、探したわよ」

「そりゃこっちのセリフだぜ」

魔理沙の箒がだんだん地上に近付き、私をちゃんと降ろすと霊夢に先ほどの旨を伝えた。

「キノコ鍋ね。ふふ、魔理沙、あなたに料理ができるのかしら？」

昨日の失敗が自分だけじゃないことを証明したいのか、霊夢は魔理沙を挑発している。

「……鍋でどうしたら失敗するんだ？」

心底不思議そうに、魔理沙は答えたのだった。

魔理沙の家に帰ると早速魔理沙は台所に行っちゃった。取ってきたキノコを水洗いしておき、土を洗い流すと、鍋に入れる出汁を作り始めた。霊夢や私が「手伝おうか？」といったが、なぜか断られてしまった。

「よし、なかなかの出来だぜ」

30分もしないうちにおいしそうな匂いが香ってくる。手軽でおいしい鍋は、早苗もよく作ってくれる。私も結構好きな食べ物だ。

「う、いい匂いね。思わず食欲をそそられるわ」

霊夢が負け惜しみ確実の言葉を発する。

確かにこれはいい匂いだ。結局昨日の夜、何も食べることができ

なかった私としては匂いだけでお腹がなりそうだ。

「霊夢、これでどうだ！」

バーンツとドラでもならされたような衝撃を持ってその鍋の蓋が取られた。

キノコ鍋とは言っても何もキノコだけで構成されるわけではない。確かにキノコが半分を占めているが、それらすべては細かく一口大に切られていて、こちらへの配慮が見受けられる。もう半分は白菜にネギ、野菜。それと何かわからない下処理された肉がおおよそを占めていた。隙間からぐつぐつと見える出汁の色は食欲を誘う。

「くう〜……努力の勝利か……初めて負けたわ、魔理沙」

「おっしやー！！」

「確かに、これはおいしそうだね……………」

「ぐくりと生唾を飲み込む。まさに垂涎すいぜんの逸品だ。

「じゃあ早く食べるか。鍋が一番おいしい条件は『大勢で』『熱いうちに』だからな」

それに同意し、早朝の光を見ながら鍋をつついた。

〜少女食事中〜

「あの肉がクセがあつたわね」

「確かイノシシの肉らしいよ？ クセがあるけどなれたらおいしいんだって」

鍋をつつき合ったあと、魔理沙は二度寝すると言い出し、ついでで拾ってきた魔法キノコの準備をして寝室に戻って行った。

『ねえ、他においしそうなもの探すとしたらどこがいい？』

『そうだな、迷いの竹林辺りがいいんじゃないか？ あそこのタケノコは美味いらしいぞ。ついでに兎の肉とか美味いかもな』

そう言っであくびをしたあと、『宴会、楽しみにしてるぜ』といつて私たちと別れた。

「それで魔理沙の助言通りに来てみたけど……」

「立派な竹林だね。でも」

「こんな道をどう進めば……」

「絶対に迷うわね」

私達の前に立ちちはだかったのは広大な竹林の壁。人が通る隙間が確保されているものの、ほぼ獣道で進めるかどうかは分からない。

初めてここに足を踏み入れる私にとっては未知の領域ということだ。「霊夢は以前どうやって入ったの？」

「ああ、なんか兎がいたのよ。人型の。ちょうどあんな感じの……

……」

『ちよつと、てゐ！ またあんたはこんなイタズラばっかして！』

『ちよつとしたお茶目なもんじゃないか！』

『落とし穴の中に水貯めて……悪戯の範囲を超えてるじゃないの！ おかげで服が濡れちゃうし！』

長い髪を揺らしながら、鈴仙と呼ばれた兎？ てゐと呼ばれた黒髪の小さい兎を追いかけている。兎といってもどちらも人型。鈴仙はブレザーのような服、てゐはピンクのワンピースを着ている。

右から左に、左から右に。二人の兎がお互いを罵倒しながらぴよんぴよんはねている。

「てゐ……てゐ……」

あれ、どこかで聞いた名前だ。

『こら！ 待ちなさい！』

『待てと言われて待つ奴はバカだね！ 鈴仙もそこは分かってるんでしょ！』

『そうだけどっ！ いい加減にっ！』

「ねえ、霊夢、そろそろ止めたほうが」

「あ、ああ、そうね。ついでに案内してもらって」

コホンと霊夢が咳払いをして息を整えている。霊夢も私と同様にこの状況についていけなかったのだらう。その気持ちはわかる。

「ちよつと、あんたたち……」

『もとはといえば、鈴仙が師匠の草もちを食べてたから！』

『私はちゃんと師匠に許可を取ったわよ！ それをあんたが後から来てドカ食いするから全部なくなっただんじやない！ だいたい、それは先月の話でしょうが！』

『それに対する報復活動だよ！』

『その報復はもう3回も受けたでしょうが！』

「話を、きけええええ！！」

ついにキレた霊夢が二人を一喝する。ぴたりと二人は止まって初めて霊夢に気がついたようだ。気づくでしょ、普通……。

「え、どうして博霊の巫女が……な、何しに来たのよ！」

二人のうち、髪の長い兎が警戒しながらこちらを向いた。

「あゝ、もういいわ。鈴仙、面かしなさい！」

まだ多少イライラしている霊夢にビクツとしながら、鈴仙と呼ばれた兎は「何で私ばかり……」と不満顔を前面に出してついていた。

それをケラケラと笑いながら「ざまあみろ」と叫んでいる兎に近づいた。おそらく私の記憶が正しければ、彼女は……。

「久し振り……いや、はじめましてね。てゐ」

「ん？ おやおや、これはこれは、妖怪山の一柱か。私なんかに声をかけるとは驚きだな」

「あなた、因幡山の素兎でしょ？ 鮫に食われた皮はもう大丈夫なの？」

うん？ つと、てゐが疑問を口にする。みるみる顔を青ざめて…、やがて睨みを利かした表情で喋り出した。

「……一体どこの神だ？」

先ほどまでの陽気さとは違い、何千年も生きてきた妖怪としての問いなのか。

「なに、同じ時代に生きてきた者よ。ミシャグジ信仰といえば分かるかな？」

警戒するな、という意味をこめて自らの身分を明かす。ミシャグジ……という言葉に反応し、てゐも納得したようだ。

「ああ、信濃のミシャグジか。いや、越中か？ 恐怖信仰でこちらまで有名だったよ。乗っ取られたあともよく……ね」

「そりゃどうも。あなたも有名だったわよ。因幡の素兎。間抜けで狡猾で、でも人々に幸運を与えるシンボルってね。それと信濃であつてるわよ」

「ああ、おかげで長生きできたよ。んで妖怪化し幻想郷に紛れ込んで今に至る。ちなみに一緒にいたのは月の兎だ。まあ、玉兎だな」

「へえ、あの子が。なるほど献身的なまでに尽くすタイプね。月の兎の特徴だわ。自らを焼いてまで老人を助けたその自己犠牲は月に深く刻まれたわね……」

「だから私は、鈴仙とは相いれないのさ」

「昔から誰かをだましていたあなただったら、自己犠牲など当然理解できない事だろうからね」

「そういうこと。それと悪いね、見苦しいとこ見せて」

「気にはしていないよ。八雲紫が幻想郷を仕切っていると思っただけけれど、あなたのような古株までいたとわね。また今度神奈子と交えて酒でもいかが？」

純粹な厚意で誘ったのだが、それはにべもなく断られた。

「いや、やめておくよ」

あまりにも早い返答に息を詰まらせる。

「どうして？」

「蛇に睨まれたらカエルは動けなくなっても、ウサギはそのまま食われるからね」

確かに神奈子は睨んだ相手をそのまま逃がしはしないだろう。

「そんなに神奈子が怖い？」

「当たり前。……蛇は嫌い。執念深くてプライド高くて、そのくせ牙に毒を仕込んで。麻痺してる相手をそのまま飲みこんで胃で溶かす……。……嫌なやつだ」

「ま、そうだね。気に入られたら巻きつかれて逃げられないけど」

「それは実体験？」

「いちおう、忠告。こちらと関わる気がないのなら、完全にかかわらないことをお勧めする。私と早苗はともかくね」
てゐは私の顔を一度だけ見た。

「こつちこそ、お願いするよ。顔合わせはこれでおしまい。お互いはこれから他人の振りで行きましよう」

それきりてゐとは何も話さず、霊夢たちが帰ってくるのを待った。
霊夢、遅いなあ。

『……やってらんない！ 冗談じゃないわ！』

『いいじゃない、一匹くらいくれても』

喚きながら二人とも帰って来た。どうやら何かこじれたみたいだ。霊夢が頼み込んで（とても丁寧とはいえないが）鈴仙という兎が拒絶している。

「どうかしたの？」

それをてゐが聞きだす。ま、おそらく会話から鈴仙の怒っている内容は大まか理解できるが。

「兎を一匹寄せさせていうのよ！ それも宴会で食べるからって理由で！」

「いいじゃないあんなにいるんだから！ 一匹くらい焼いて食べてもバチは当たらないわよ！」

その霊夢の発言に辺りの草むらがわさわさ揺れた。おそらく鬼たちは身を震わせてその身を小さくしているだろう。かわいそうに。ちなみに蛙は鶏肉みたいでおいしいそうだけど、霊夢には言わない食に困って食べられたら、チルノより性質が悪いし。

「ふーん、いいんじゃないの鈴仙。一匹くらい。おいしいそうだし」
それにてゐが後押しする。それを聞き、鬼たちがいつせいに逃げ出したようだ。生物の気配がどんどん遠ざかっていく。

「てゐ、あんた共食いしたいの!? 病気(RSE)にかかっても知らないわよ!」

「てゐの方が話分かるわね。それじゃあ貰って行くわよ」

グイツとてゐの首根っこを掴み、霊夢は帰ろうとする。その行動の意図が何を意味しているのか、理解するのに数秒かかった。

「行くわよ諏訪子」

あまりの事態に茫然自失していたてゐは、まだ理解できていないようだ。目が点のまま、戻っていない。

「ちょ、ちよつと霊夢、兎じゃなかったの!? 私、そんな兎食べたくないよ! 完全に傍目から見れば私たちが共食いしてるみたいじゃない!」

「そ、そうよ! 私味には自信があるけど……ていうかなんで私!? 兎つて言つたじゃない!」

霊夢は獲物のようにてゐを引きずって、その姿勢のまま歩きだした。

「兎には変わりないし、鈴仙が言うには兎は一匹も渡さないらしいから、妖怪兎ならいいかなあつて」

「こんなの調理すれば、どこを食べればいいか食べる方が困るでしょ! 料理が食べる人を困らせるなんて聞いたことないよ!」

「あゝ、それもそうね。私も困るわ。焼けばいつかゝって思ってたから」

てゐの丸焼き姿を想像したのか、頭を押さえて霊夢もどうやら思いどもったようだ。

「でも、食ったら一緒よ。こいつも兎なんだし、容量多いほうが大食漢たちも満足するでしょう。むしろ好都合よ。この際、姿かたちは問わないわ」

苦渋の選択をしたかのように、やっぱりてゐを引きずっていく霊夢。先ほど関わらないと協定を交わしたてゐが、売られていく子牛のような目で私に語ってくる。助けて……と。

「ちょっと、髪の毛長いあなた。このままでいいの？」

唯一の望みをかけて鈴仙を指差す。自己犠牲の強い月の兎は困ったような顔をして霊夢につれられていくてゐを見守っている。

「うーん、博麗の巫女相手に無謀な戦いを仕掛けるのも間違ってるし、てゐを助けたいのはあるんだけど、どうせこのまま連れて行かれるだろうし……痛い思いはしたくないし」

考えあぐねていた鈴仙が己の中にある天秤を傾けて思案するか、何か答えに達したのか『あ……』と呟いて霊夢に声をかけた。

「霊夢！ あなた宴会の食材探してるんでしょ！」

ちよつと遠くに行ってしまったため大きな声を張り上げている鈴仙。

「そうだけど〜！」

間延びした声が聞こえた。ついでにすすり泣くてゐの声も。

「だったら、兎をもっていくより！ タケノコをもっていったほうがいいんじゃないの！」

あ、その手があったか。

つまりは代償行為だ。てゐの代わりにタケノコをもっていく。どうせ誰かが食べるだろうからてゐを丸焼きにして食べるよりタケノコをてゐの容量の倍もっていくほうが宴会も派手になる。

単純な量の問題で納得したのか、霊夢もその提案を飲むようだ。てゐをその場で開放し、こっちに向かってくる。

「そっちのほうがいいわね。得体の知れない兎を焼くより罪悪感もないし」

「そうでしょ？ タケノコはこっちで用意してあげるから、宴会の

ときに持つていくわ。もともとそのつもりだったし」

「分かった。それじゃ、よろしくね」

てゐは鈴仙の陰に隠れて霊夢にすごく怯えている。それもそうか、なんてつたつて食べられる姿を何度も想像してみただから。顔面蒼白のてゐはそのままどこかにいつてしまった。

「代わりとってはなんだけど、何かおいしいものつてどこかに無いかしら？」

「おいしいもの？ うん」

鈴仙は突然霊夢に聞かれて考え始めた。さて、魔法の森のキノコに迷いの竹林のタケノコ。次は何をとりにいくのか。

日はまだ正午を過ぎた辺りかまったく落ちる気配も無い。いつもならこの時間、チルノを追い掛け回しているのだが 昨日と同じように。

「あ、夜雀のウナギとか紅魔館の紅茶とか、妖怪山の秋姉妹の焼き芋とかは？ かなりおいしって評判だけど」

「そっちも後で回ってみるわ。ありがとね」

霊夢の後にいつて私も迷いの竹林から離れた。

霊夢と一緒に宴会用にくっつかカンパ（食べ物、お酒）を脅迫、交渉、強奪を繰り返していき、床についたのは結構遅くなつてからだった。守矢神社では考えられないほど目まぐるしい一日だった。

今思い出しても昨日のことが鮮明に思い出される。クタクタになつた足と体が心地よい眠りに誘おうとする。目を瞑れば思い出すのは昨日の神奈子の言葉。

『さあ、何だつたかね。あの子のことを私は理解していないし……』
シヨックだった。一番の理解者である神奈子が私を理解してくれていなかった。

それは神にとって致命的だ。

信仰心……というのは神の知名度みたいなものだ。この神が自分たちにとってどのような利益を与えてくれるか。大半はその損得勘

定が神の力を決めてくる。無論、熱心な信仰者は一人いるだけで神を支えてくれるものの、恐怖信仰に支えられた信仰の義務からでは真に神を尊ぶものではなかった。

神奈子は私の間違いを正した唯一の神だ。いきなり単身で乗り込んできて私の大国を滅ぼした……そのときは破壊神かと勘違いした。もう神奈子とは何千年の付き合いにもなる。私のそばにいて、一番私を理解してくれている。そう思っていたのは私一人だった。そう思った瞬間に、目の前が真っ暗になった。

私を畏怖の対象とする人。私を信仰してくれる人。私を認めてくれる人。

結局何千年経とうが、今まで一度も私の理解者は現れなかったのだ。

その足で霊夢を訪ねた。

第一印象は神社を襲撃しに来た最悪なやつだったけど、こちらが無害なら何もしてこないと思ったからだ。それに、ここ以外に頼れる場所が無かった。

だから私は霊夢を頼った。

私と関わりがあり、私を受け入れることができ、私を知らない霊夢を。

結局、神奈子と早苗には悪いことをした。黙って出てきたし、何より心配していることだろう。あの一言が会話の中でぼろっと出てきた言葉だったかもしれない。

でも、もう　　確かめるのも怖い。

私の思考は深くなっていくばかりだった。

その日は宴会当日……だった。

「……………」

誰も、何も言わない。

幻想郷の誰もが楽しみにしていた宴会は、あいにくの雨だった。白玉楼の庭も雨が降り注ぎ、とても宴会などできる場所でもなかつ

た。

それに、桜も雨で散りかけている。

満開まで待ったせいもあるが、逆にそのせいで雨が容赦なくたたきつけ桜の花が散っていく。集まった人々の落胆が見えるようだ。

地面だけなら、私で何とかできる。坤こんを操って地面を創造すれば固めるなどたやすいことだからだ。

しかし、もう遅い。

雨は止まないし、桜も散ってしまった。

地面だけ固めても、いまさら仕方ない。

一人、また一人と帰っていく。吸血鬼も、天狗も、魔法使いも……その中にいた神奈子も早苗も。

「諏訪子……帰るわよ」

霊夢もまた、帰ろうとする。

私はそれに首を横にする。

「そっか、じゃあ、私も付き合っわ」

「……ありがと」

隣で霊夢も傘を差して、一緒に待っていてくれる。

辺りもざわめきから小声に変わっていく。

白玉楼の主と、従者はいつまでも帰らない私を心配しているようだ。

「諏訪子……」

「……悔しい、悔しいよ……霊夢っ……」

吐露するような自分の気持ちがあふれ出してくる。

「あんなに頑張ってきたのに……一緒に霊夢と頑張ったのに……雨が降るだけで、こんなにも楽しい気持ちが無くなってしまっ……」。

こんなとき人を助けるのが神様だっと思ってきたのに、私、何もできない……っ！……悔しいよ……霊夢」

しばらく私の話を聞いた霊夢は小声でもう一度私の名前を呼び、凍えた私の体をぎゅっと支えてくれた。4月に近いとはいっても雨が降るとまだ寒い。そのことを考慮してか、力強く抱きしめられる

と温かくなった。

もう、辺りには誰もいない。そう思っていた。

みんなが落胆を示してから一時間は経過している。とりあえず様子を見て、明日が無理ならあきらめるという結論にたどり着いてみんな解散したのだ。

「……これ以上は風邪を引くわ。帰りましょう……諏訪子」

そう判断した霊夢は私の手を握って帰路に着いた。

「やっぱり、何とかしたい」

そう思っただけで飛び出したのは深夜を大きく回ってからだった。

霊夢に何も告げず、白玉楼まで走る。何かできるわけでもない。だからって何もしないのもいやだ。

少しでも地面を乾かすことができれば、曇りでも花見はできる。

雨はほんとに運任せだ。桜も根性にかけるしかない。

白玉楼につくと、その主、幽々子が夜桜を見ていた。

「あら、こんな時間に何か用？ 洩矢諏訪子」

「あなたこそ、寝ないの？」

ふふふつとやわらかい笑みを浮かべて扇をバサツと広げる幽々子。「亡霊は寝ないのよ。目を閉じて意識を遮断することはあるけれど、睡眠をとらなくても変わらないしね。……見ておきたいのよ。今年の桜、これで見納めだから」

「なんで……そんなこと」

「雲の流れが違うのよ。この雨は2、3日は続くわね。私の観測は正しいわよ」

「そんなの、知らない。私はあきらめない」

無駄なことよ……と幽々子は私を見つめてくる。雨のまだ降っている庭でいくつもの「坤」を創造する。

地面を新しくすることで乾いたものにし、しかしそれが新しくするたびに雨にぬれていく。

そんなことをいくつか、何度も、繰り返すうちに見てられなくな

ったのか幽々子は部屋に戻っていった。

「く……う」

地面を軽く握る。乾いた土が雨によって濡れていく。私の服も、私の髪も、この濡れた地面のように惨めに思えた。土にまみれて泣き崩れて、一体私は何ができるのだろう。

誰もいなくなった白玉楼に私の鳴き声が木霊した。

白玉楼の大きな桜の木の下で、私は疲れて蹲った。

言葉もなく、ただ地面を見つめて散っていく桜を見つめていた。

地面はもう桜の花で埋め尽くされていた。桜色の白玉楼は壮観だが物悲しい。空はそろそろ白み始め、気の早い者がそろそろ花見を期待して現れる頃だろう。

やはり、じゃっじゃっつと白玉楼の砂地を踏む足音が聞こえてきた。しかし、その足音は私に気づくと、足を速めて近づいてきた。

（一体誰だろう）

散ってしまった桜を見て愕然した誰かだろうか。

とても快晴には思えない曇りの空を見上げると、そこにいたのは、

「まったく、どこまで心配させるんだ……」

「諏訪子様……心配しましたよ」

呆れ顔の神奈子と、早苗だった。

「二人とも、どうして……」

その第一声を聞くや否やため息をつく二人。

「あのねえ、そりゃ何も言わずに神社を出て博麗の巫女さんここでお世話になってるって聞いたときは、怒って探す気にもならなかったわよ」

「どうして……それを？」

「紫さんですよ」

やわらかい笑みで神奈子と諏訪子を見つめ、早苗はこちらに手を

出てきた。

「何で出て行ったのかは、分かりません。神社が嫌になったのかも知れないし、神として居ることが辛くなったのかも知れないとも考えました」

「諏訪子、あんたが出て行ってから紫に聞くまで、早苗、あんまり眠れなかったのよ」

「……その、ごめん……」

早苗の手をとって立ち上がる。微かな朝日が雲の隙間から一瞬顔を出し、神奈子と早苗を光で照らした。思わず逆光に目を瞑るが、また厚い雲が光をさえぎり改めて二人の顔を見た。

神奈子は……まだ怒っている。早苗は目の下の隈が申しわけなくなる。

「霊夢さんのところで宴会の準備をしているのも、諏訪子様が一日幻想郷を走り回って集めた食材のことも、昨日ここで泣いていたことも、ここに夜中からずっと地面を固めて宴会を再開させようと頑張ったことも。全部、後から聞いたんですよ」

あの隙間妖怪が、なんで。

そこまで思い至ってここがどこであるか思い出した。

白玉楼の主、西行寺幽々子は、八雲紫と旧知の仲の人物だったはずだ。さては夜桜を見た後早苗たちを呼ぶように幽々子が紫に。

「なんで諏訪子様がこのようなことに思い至ったかどうかは、聞きません。宴会を盛り上げようとしたこともご自分に深い考えを持っていたかもしれない。全て後から教えられた私たちには、その権利がないですから」

「ま、そういうことだ。宴会を盛り上げようとしてくれたことには変わりないようだしね。この件について、私から追求することは何も無い。悪いことといいことで、ま、帳消しだね」

神奈子も早苗も、私を受け入れてくれるの？ こんな自分勝手に家を出て、後ろ向きに考えてばっかで、何もできなかった私を。

「あの、早苗、神奈子、私　　っ！」

言いかけた私に早苗が手で止める。

「いわなくていいですよ。諏訪子様が笑ってくれるなら、他に何もいりません」

「早苗　　」

柔らかな笑顔で早苗は私を抱きしめる。泣きたい。思いつきり泣いて、このままですつといたい。でも、早苗はそれを望まない。だから　　。

「えへへ、あーっ」

無理してでも、私は笑うことを選んだのだった。

一段落着くと、私の心が抱えていたしこりの様なものが消えた。今は神として消えるより、早苗と神奈子と一緒にいられなくなるほうが怖い。誰も信仰をくれなくても早苗は私を支えてくれる。早苗が私を必要としなくなったとき、おそらく私は神として死ぬことを後悔なく選ぶだろう。

「さてと、まずは場を整えないとね」

朝日が昇ってしばらく経つが、その日が当たることはない。ここに来たのも今のところはすまし顔の幽々子と、そばに仕える妖夢。そして酒を片手に寂しそうな顔をしている萃香。そして諏訪子を心配してきた霊夢。

「諏訪子！　あんた勝手に飛び出すんじゃないっ……って、あれ？　早苗に神奈子？　仲直りしたの？」

「はい……まあ」

「ありがと霊夢……お世話になりました」

お礼の意味をこめて深々とお辞儀する。霊夢は何か安心したように「ま、仲直りしたのならいいわ」とやさしい声音で話しかけてくれた。

「でも勘違いしないでね！　諏訪子、あんたに一度言っておきたいことがあるのよー！」

「な……何？」

思わず霊夢の気迫に身じろぎする。一体なんだろうか？

ぼそぼそと、私の耳元で小さく小さく、小声で。

「私の料理の腕はあんなのじゃないんだから、今度絶対食べに来なさい。私の料理の腕を証明してあげるわ」

しばらく霊夢は恥ずかしそうに顔を染めながら、そんなことをいつてきた。

「いい！ 絶対今度までに腕を上げておく……じゃなくておいしいものを食べさせてあげるからね！」

「うん！ 楽しみにしてる！」

案外負けず嫌いな霊夢に、私の顔は自然に笑っていた。

「じゃ、そろそろ始めるか」

神奈子は諏訪子の帽子をぐりぐり回し、曇りの空を見上げた。

「宴会、やるんだろ？ 諏訪子が必死に作ろうとしたもの、守つてやるのが私だからな」

神奈子は両手を空に向ける。

それを何かこじ開けるように手を左右に大きく開くと……。
空が割れた。

たったそれだけ。それだけで今まで無理だと思っていた曇り空が左右に割れる。その光景にその場の全員が思わず口をあけた。

「え、え？ 神奈子、何したの？」

「何って……乾けんを操るのが私の能力だし。突き詰めれば風や雨を操るのがもともとの私のことだしね。今のはただ風の流れを強引に雲にぶつけて吹き飛ばしたんだよ。……あまり天候に接触するのは天人との約束に触れるから、あんまりやりたくはなかったんだけどねえ」

力技で吹き飛ばした空には見事な太陽が見えた。それを見たせいか、幻想郷中から花見を諦めかけていた人々や天狗が何事かと駆けつけてきた。

「さ、後はあんたたちの仕事だよ。諏訪子に早苗」
「はい」

早苗は簡潔に答えるが、私は何のことか分からない。
神奈子が地面を指差し、濡れた地面を指差した。

「え……でも、地面を固めても桜が……」
「いいから、やりなさい」

神奈子に後押しされて、坤を操り地面を固める。これで花見会場は整った。しかし、肝心の桜はほとんど散ってしまった。散った桜で花見をしようともいいうのか。

「幽々子、あんたにちよつと聞きたい。早苗はそのまま待機。準備しときな」

早苗は頷いて力を溜め始めた。

「さて、幽々子、あなた以前『春度』とかいうやつを幻想郷から奪ったわよね？」

「ええ、確かに。でも何で ああ、残ってるわよ。妖夢、とつてきて」

「あ、はい」

「あなた、なかなか過保護ね。たかが花見にここまでする？ 後々、天人に何言われるかも分からないわよ」

「ま、それぐらいなら軽い。たかがその程度のこと、花見を中断するなんて馬鹿馬鹿しいからね」

「ふふ、まあそういうことにしておきましょうか。たかが花見でも、ここが騒げるお祭りになるなら死者の魂も救われるというものよ」

妖夢が帰ってくるとぼんやり光るものを持ってきた。何かに入れられているが、それを使うらしい。

「いっておくけど、これは本当に少ない『春度』よ？ 残念ながら花を開花させるまでには強くない」

「ああ、そこらへんは問題ないよ」

神奈子が妖夢からそれを受け取ると目を閉じて集中している早苗に渡す。

空が割れてから時間が経ったせいか、幻想郷中の妖怪や人間が集まってきた。そして早苗は人々が十分集まったのを確認してから、神奈子から受け取った入れ物のふたを開けた。

「諏訪子様の願った光景を後押しするだけです。……ほんの少し、無茶ですけどね」

早苗はそういつと『春度』を解き放った。早苗はもともと天候操作関係の奇跡は起こせるが、それ以外の奇跡など見たこともない。けれど、その天候の条件を覆して、『桜を开花』させなおすのだからと気づいた。

だがそれは途方もなく無謀なことだ。

まず力がない。それに信仰が足りない。半端なままに力を暴走させるだけだ。

「それじゃ、最後の仕上げだ。諏訪子、早苗の手握って」「？」

言われるままに早苗の手に触れる。するとズンと力を吸い取られる。

神奈子も同じように手を握ったようだ。

「いいかい？ 今から早苗の能力に私たちの力で無理やり方向性を強制させる。一度つきりだが、早苗に神の真似事をさせるのさ。私や諏訪子には、奇跡を起こす力などないからね」

「分かったけど、どうやって？」

「今早苗を媒介にして私たちの力が吸い取られているのさ。私たちはこのままでいい」

神奈子はそれきり言うつと、力を早苗に送ったようだ。早苗も難しい顔をして『春度』に力を送っている。

早苗の大幣が大きく頭上に掲げられ、『春度』が空中で増殖し早苗が祝詞を言い始めた。

「忌竹に神繩引き回し神籬刺し立て、言巻くも畏き「神名」大神の御前に白さく、掛巻も畏き「氏神さまの名前」産土大神の御前に、掛巻も畏き「神社の名前」の大神、祓戸大神たちの大前に、汝命や

先頃より身勞みいたつきて、ここに奇跡の代償を要求する！」

幽々子から受け取った『春度』を増幅させ空にはら撒くのは光り輝く奇跡。それは空に風で吹かれ白玉楼全体を覆った。

桜色の光が木に降り注ぐ。白玉楼全体の木々にそれが降り注ぐと徐々にその光が花びらとなってもう一度花を咲かせた。

白玉楼での花見はこれまでの花見以上だった。

地上に降り積もった桜の花に空を飛び交う小さな花びら。それを酒の肴に魔理沙のキノコや、鈴仙やてゐが持つてきてくれたタケノコがいろいろ調理されているんな人の下に回った。

こんな花見はいつ以来だろう。

霊夢が持つてきたお神酒を一瓶飲み干して、白玉楼の屋根の上から眺めていた。隣では神奈子が萃香からもらった酒を杯について飲んでいる。早苗は霊夢たちに酒を飲まされて今は白玉楼内で休んでいるはずだ。

「ねえ、神奈子」

「ん？ なんだい」

「こんなこと、いつ以来だろうね」

酒によるほろ酔い気分なのか、じっくり熟考してから神奈子は答えた。

「ああ、花見かい？ そうだね、久しぶりすぎて覚えてないよ。でも確か……」

「うん。早苗が小さいときに、一度だけやったよね」

「あんたが子孫の様子見て、私と協力して今日みたいなことしたっけ……そのあとすごく怒られたけど」

「あはは、そうだったね。天候を操作したのがバレて、二人で逃げたっけ」

下で騒ぐ幻想郷の人たちを見る。みんな笑顔だ。その表情に満足した。霊夢の、魔理沙の、てゐの、鈴仙の……そして早苗や神奈子の顔は全員ほころんでいる。

「神奈子、神奈子は怖くない？　いつか私たちが消えてしまつかもしれない」と

「ん、どちらとも言えないね。この姿になって長生きはした。けれど満足のいく人生でもなかった」

「私も。まだまだやり残したことがあるよ。……とくにさっきの早苗の祝詞にはびっくりした」

「霊夢もびっくりしてたな。何せ、結婚式や地鎮祭の祝詞を片っ端から繋げて最後はオリジナルの言葉で結んだわけだ。あれでよく奇跡を発動できたと思うよ」

「そうだね。……でも逆にほっとけなくなったよ。早苗のこと、守ってあげなきゃって思った」

「なら、もう心配かけるようなことはするなよ」

「あーうー……反省してるよ」

なら良し……とさらに酒をあおる神奈子。それを横目で見ながら、私もお神酒を瓶ごと傾けた。

下から聞こえる騒ぎ声を聞き流しながら春の陽ざしにうたたね気分、今までで一番の花見をしたのだった。

「そついえば諏訪子様？」

「ん？　どしたの早苗？」

花見から一週間。未ださめやまぬ興奮と過ぎ去ってしまったものさびしさを抱えながら、お茶の間で煎餅を齧っているときだった。

早苗と相席し、どこかに出かけた神奈子を待ちながら早苗と雑談しているとき。

「神奈子様ってどういう神様なんですか？　本人に聞くのは大変失礼な気がしますし、二人のことをもっと理解したいですから」

「神奈子のこと？　うーん……」

あれ？　そついえば神奈子って何してるっけ？　農業の神だったような気がするけど先日、風も操ってたし、よく考えればお互いに

自身のことを詳しく話したことになかったしなあ。

「うーん、分かんない」

本人がいないのに憶測を話しまくって早苗を混乱させるのも悪い気がして、確証のないことは言わないことにした。

そのとき誰かがいる気配がしたのだが、すぐにどこかに消えてしまった。誰だろうかと気になったが、早苗が別の話を振ってきたので楽しく談笑することを続けた。

その日、結局神奈子は帰ってこなかった。

「霊夢、家に泊めて頂戴」

「いや、まあ、諏訪子にも言ったことだけど、神社って神様の社なのよ？ 他の神様だろうが受け入れてやるぐらいの容量の深さがあるんだろうけど……ま、いいわ。どうせ諏訪子が引き取りに来るでしょ」

「諏訪子なんか……諏訪子なんかあ……」

泣き出す寸前の神奈子を慰めながら、やれやれと霊夢はため息をつく。

「どうしてうちの神社には他の神様が居つくのかしら」

それはきつと彼女なら何とかしてくれるという甘えなのだが、霊夢がそのことに気づくのは一生ないだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0820t/>

東方蛙鳴遊

2011年5月7日17時56分発行